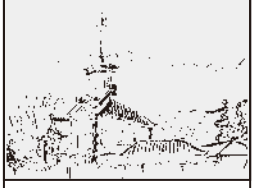
城北



平成30年3月1日現在

総世帯数	3,583
総人口	7,729
男	3,688
女	4,041

城北人物風土記

単身中国に渡り女子教育に当たった 河原 操子 さん

教育者を夢見て

西町生まれの河原さんが中国に渡ったのは、明治35年（1902）27歳の時でした。

幼い頃から開智学校の訓導を務めていた父の忠から「国家百年の計は教育にある、日本と中国（当時は支那）が手を取り合わなければ東洋の平和はない」と聞かされていたことから、中国での教育者になることを夢見ていました。

そして、長野県師範学校から東京女子高等師範学校に進みましたが、卒業直前になって健康を害して帰郷し、長野県高等女学校（現長野西高校）で教鞭を執りました。

単身中国へ

しかし、父親の言葉とともに中国での教育の夢は止み難く、当時女子教育界の第一人者といわれた下田歌子の推薦で、横浜の在日清国人の学校に就職し、一年後に海を越えて上海の女学校の教師になりました。

当時下田は「初めて彼国に赴任して子女の教育するものなれば、教員としての実力以外に日本婦人を代表する覚悟なかるべからずや」と檄を贈っています。

内蒙古・カラチン王府へ

河原さんは、明治36年（1903）に内蒙古のカラチン王府が初めて開設した女学校の教師に下田の推薦で赴任することになりました。

当時日本はロシアと一触即発の状態にありましたが、河原さんの赴任には、カラチンに親日の地盤を築くという同郷の福島安正や川島浪速の思惑もあったと言われます。

河原さんは、地理、歴史、習字の一部を除いた教科を担当し、60人の女子生徒を教育する一方、月に数回の講演会を開いて、内蒙古の生活改善に取り組みました。

表は教師、裏はスパイ

明治37年（1904）2月、朝鮮半島と南満州で日露戦争が始まりました。

カラチン王は親日でしたが、王府の中には親露派もいて、河原さんは万一に備えて父親譲りの短刀を肌身離さず身に付けていたそうです。

河原さんは異国での教育に情熱を傾けましたが、教育者としての表の顔と軍事上の機密を調べる裏の顔を使い分け「カラチン王府内の諜報活動の任務も負っていた」と述べています。

河原さんは日露戦争後の明治39年（1906）に帰国し銀行員と結婚して渡米、昭和20年（1945）に熱海で亡くなりました。70歳でした。

なお、河原さんの後任は考古学者の鳥居龍蔵の妻きみ子が勤めています。

同心口張町会が発足

同心町と口張町の2つの町会は、4月1日から同心口張町会として活動することになりました。

このため、3月25日にそれぞれの町会で最後の総会を開き、29年度の事業報告や会計報告などを審議した後、会則のほか30年度の事業計画案や予算案、役員人事などを審議し、4月1日の新町会発足に備えることにしています。

同心町と口張町は、戦後まで1つの町会でしたが、間もなく2つの町会に分かれ独自の活動をしてきました。

しかし、平成に入ってから加入世帯が合わせて80世帯に激減するとともに、少子高齢化もあって役員の選出や町会活動にも支障をきたすようになり、27年から合併に向けての話し合いを進めてきました。

その結果、90％の世帯の賛成を得て再び1つの町会として活動することになりました。

新町会の発足総会は、4月8日に開くことになっていますが、松本市では市街地での町会合併は今度が初めてです。

白金町会のイベントに
和太鼓が轟き渡る

毎週土曜日になると蟻ヶ崎児童館から和太鼓の勇壮な音が響いてきます。遊戯室に勢ぞろいした白金和太鼓教室の皆さんが打ち鳴らす太鼓の揃い打ちです。

白金町会は、沢村公園で毎年開催している運動会や夏祭りを盛り上げるため、今まで外部の和太鼓グループを招いていました。

最近、和太鼓に関心を持つ人達の中から「和太鼓花水木（はなみずき）」代表の召田正康さんが町内におられるのだから、この際講師をお願いして和太鼓団体を結成しようという気運が高まりました。この要請を快く引受けた召田さんが昨年末には体験教室を開き、その後講師として毎週土曜日に本格練習を始めました。

現在、町内の幼稚園年長組から80代まで男女15人が、大人が一抱えもある大型の長胴太鼓に向い、講師の小気味よい締め太鼓に合わせ、全身で基本の曲「ワッショイ」に取り組んでいます。演奏デビューとなる5月20日の町会運動会に向けて、練習はいよいよ本格化、3月は5回の土曜日、熱の入った練習が続きます。最高齢の池田さんは「こんなに若い人達とリズムを合わせ、体中を動かすことは爽快そのもの」と語っていました。

開智小児童が
「観光地新聞」を配布

3月9日、開智小学校5年2組の34人が、あいにくの雨の中、松本城や松本駅お城口駅前で松本の名所、旧跡などを紹介する12頁の新聞を、観光客らに配りました。

これは、総合学習のなかで2学期から編集を始めた新聞で、市役所、商店会などを取材し、観光都市松本の魅力をもっと多くの人に知ってもらいたいとの考えで作ったものです。

松本の地理、歴史を学習することや、有名とは言えないかくれた名所を見つけ出すことは児童が松本を再発見する契機にもなっています。身近にあるお城が世界遺産に登録を目指していることもきっかけのひとつです。

編集にあたって「どこの、だれに問い合わせればよいのかなど、取材の難しさ、大変さを実感しました。また、英文の項目を付け加えてよかった」と話してくれました。オーストラリアから訪れた観光客は「ビューティフル、雨天なので、ポリ袋に一部ごと入れてくれてありがたい」と感心していました。

児童が学校をとびだしてこのような活動をするのは初めてです。

2月24日 軽スポーツ大会